

| | |
|--------------------|---|
| Title | 持続可能な観光における大学の役割：ブラジル・バイーア州立大学のコミュニティ・ベースド・ツーリズムプロジェクトの事例から |
| Author | 鈴木, 美和子 |
| Citation | 都市と社会. 4 巻, p.42-64. |
| Issue Date | 2020-03 |
| ISSN | 2432-7239 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | Publisher |
| Publisher | 大阪市立大学都市研究プラザ |
| Description | |
| DOI | 10.24544/ocu.20200420-006 |

Placed on: Osaka City University

[投稿論文]

持続可能な観光における大学の役割： ブラジル・バイーア州立大学のコミュニティ・ベースド・ツーリズムプロジェクトの事例から

鈴木美和子（大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員）

[キーワード] 持続可能な観光／コミュニティ・ベースド・ツーリズム／バイーア州立大学／多分野連携的かつ学際的なアプローチ

近年、持続可能な観光への関心が高まっている。この背景には、観光の世界的な進展による環境破壊や伝統文化消失などの問題の顕在化があり、社会問題解決や地域再生における観光分野への期待も存在する。ラテンアメリカでは、貧困や格差、社会的排除、環境破壊などの社会問題解決の手段として、持続可能な観光が NGO や中央政府、自治体の支援のもとで発展してきた経緯がある。特にブラジルでは、連帯経済の取り組みとして、地元住民を活動の主体としたコミュニティ・ベースド・ツーリズムが推進されてきた。事例として取り上げたブラジル・バイーア州立大学の「カブラとその周辺のコミュニティ・ベースド・ツーリズム・プロジェクト」は、大学周辺の 17 の地区を対象としたコミュニティ・ベースド・ツーリズム推進の取り組みである。

本研究が目指すのは、そのプロジェクトの、地域全体を支援する多分野連携的かつ学際的なアプローチである。プロジェクトに参加しているのは、観光・ホテル経営分野だけではなく、コミュニケーション、教育学、デザイン学、看護学などの 11 分野および「教育と現代性」や「知識普及」の大学院プログラム、技術インキュベーターなどで、ツーリズムを推進する上で不可欠な地域の文化・歴史の研究から、初等・中等教育機関と連携した教育活動、デジタル技術を生かしたコンテンツづくり、文化活動、エンカウンターを開催までをカバーした幅広い取り組みとなっている。事例は、コミュニティ・ベースド・ツーリズムをより理想的で実行可能なものにするために必要と考えられる支援体制を生み出しており、その取り組み自体が地域の持続可能な開発となっている。今後益々重要となる持続可能な観光の取り組みにおいて、多分野連携的かつ学際的なアプローチを通して多面的な支援を可能にする大学の役割の可能性は大きいと考えられる。

§ 1 研究の背景・目的

近年、産業政策における観光分野への注目が顕著になっているが、同時に、持続可能な観光への関心が高まっている。これらの背景には、観光の世界的な進展による環境破壊や伝統文化消失などの問題の顕在化や、社会問題解決や地域再生における観光分野への期待がある。一般的に持続可能な観光の概念は、国連提唱のサステイナブル・ディベロップメントもしくはサステイナビリティの考え方をツーリズムに適用したものと考えられており（大橋,2017:1）、国連の世界観光機関

（UNWTO）では 1998 年に持続可能な観光の枠組みとして、「世界観光倫理憲章」が採択され、2002 年に開催された国連の持続可能な開発に関する世界首脳会議（WSSD）では、「経済的社会的発展のための自然資源基盤の保護・管理」の一環として持続可能な観光の発展・促進が提議されている。

コミュニティ・ベースド・ツーリズム（community based tourism : CBT）は持続可能な観光のフレームの中で、発展してきた。大橋は「コミュニティ基盤ツーリズムについての諸論調

で、CBT とはどのようなものであるかについては、概念的にも見解は一様ではないとしながらも持続可能な観光の一形態としている(大橋,2018:1-2)。アジア太平洋経済協力(APEC)による『有効なコミュニティ・ベースド・ツーリズム:実践ベストマニュアル』では、CBT で優れた実践を行うことは、社会的、経済的、環境的な便益をもたらすというサステナビリティの三本柱の進展に役立つものであると明記している(APEC,2010:1)。CBT は、世界観光機関と国連貿易開発会議(UNCTAD)により2002年に合意された「持続可能な観光=貧困の削減」というスキームに含まれており、特に途上国においては、貧困の克服を目指した CBT の取り組みに期待が寄せられてきた。

CBT について、タイの『コミュニティ・ベースド・ツーリズム・ハンドブック:REST プロジェクト』では、「環境的、社会的、文化的サステナビリティを考慮したツーリズム。コミュニティのために、コミュニティによって所有・管理されるもので、ビジターがコミュニティや地域の生活のあり方を学び理解を得る能力を高める目的を持つもの(Suansri, 2003)」と定義しており、世界自然保護基金(WWF)では、「コミュニティが実質的にコントロールし、その開発や管理に関与し、利益の大部分がコミュニティものになるツーリズムの形(WWF International,2001)」と定義している。グッドウィンとサンチリは、これらの定義を引きながら、「コミュニティによって所有及び・または管理されるツーリズムで、コミュニティに幅広い利益をもたらすもの」とシンプルに定義している(Goodwin and Santilli, 2009: 11-12)。大橋の指摘のように CBT の定義や概念は一様ではないものの、このグッドウィン・サンチリによる理解がおおよそ一般的であり、本稿もその理解を基礎にしている。

CBT については、実践が様々な国や地域で盛んになるとともに、学術研究での議論が活発になっ

ている。アミンとイブラヒムは、近年政府が CBT に力を入れているマレーシアの事例研究の中で、CBT がアジア諸国の他、アフリカ、イギリス、オーストラリア、カリブ諸国などの観光産業の中においても重要なものになっていると指摘しており(Amin and Ibrahim,2015:539)、ダンギとジャマルは、観光研究の分野では、過去30年間に、サステナブル・ツーリズムと共に、CBT に関する文献が増加していると指摘している(Dangi and Jamal,2016:1)。

しかし、CBT の実践においては、問題も指摘されている。CBT に関するいくつかの論文で指摘されてきたのは、CBT の成功例が少ないことである。グッドウィンとサンチリは、2009年の論文「コミュニティ・ベースド・ツーリズム:成功?」で、CBT の多くのプロジェクトについて、開発途上に資金提供されているにもかかわらず、その成功は広くモニターされておらず、地域コミュニティの実際の利益はほとんど定量化されていないと問題提起をした上で、750 事業者へのアンケート調査を行なっている。その中の有意義な回答134件で資金提供者や環境保護論者、開発専門家が成功と特定した116の事例を分析した後、その内28事例について事例研究としてさらに詳細な分析を行なったが、「コミュニティの参加は、CBT の基本的な前提として、プロジェクトでは奨励されているにもかかわらず、実際に管理ができていないレベルではなかった」と指摘している(Goodwin and Santilli,2009:36)。ダンギとジャマルは、CBT の所有権と意思決定に対する住民の管理は課題に直面しており、CBT の成功例は乏しいと指摘している(Dangi and Jamal,2016:10)。

研究では、CBT の実践によって達成できるコミュニティの収入の創出やエンパワーメント、環境や伝統文化の保全など、多くの成果に関心が寄せられてきた。例えばストーンによる「CBT を通したコミュニティエンパワーメント」は、コミュニティのエンパワーメントのために CBT が推進さ

れているボツワナの事例を取り上げている (Stone,2015)。しかし、コミュニティが CBT をその条件通りに自ら実践するには、むしろコミュニティのエンパワーメントとなる事前の取り組みが必要となるはずで、成功例が少ないのは、コミュニティ自身が CBT を理解し実践する能力や知識が不足している点にあると考えられる。ヤネスらは、CBT の開発は、多くの場合、地元の人々が簡単に決定して実行できるものでないことに注意する必要があると指摘している (Yanes, et al.2019:2)。また、ジャンピッコリとサイマンは、CBT での意思決定は、完全にコミュニティの手に委ねる必要があるが、アプリアリにコミュニティメンバーは関与することができず、より一般的なレベルでは、CBT へのコミュニティの参加は、招待された形で行われ、コミュニティの自発的関与を損なうことになる旨を指摘している (Giampiccoli and Saayman,2018:7)。ドレザルは、仮にコミュニティ自身取り組みを始めようとしても、開発機関、NGO などの外部からの支援やファンドが不可欠であり、コミュニティの参加には、コミュニティの能力開発が必要で、知識やスキルを向上させるトレーニングが参加の重要な前提条件になると主張している (Dolezal,2015:17-18)。

この議論の中で注目されるのが、ジャンピッコリらの指摘である。ジャンピッコリらは、能力開発も、実際の CBT の実施において必要な前提条件とみなされるべきで、スアンスリ (Suansri,2003:12)によって指摘されたように、CBT を開発していく以前にホストコミュニティを中長期的に能力開発していく必要があると指摘している (Giampiccoli, Jugmohan and Mtapuri,2014:659)。問題は、CBT プロセスに、コミュニティを参加させることではなく、CBT プロセスの開発をどのように支援するかである (Giampiccoli and Saayman,2018:9)。

また、ジャンピッコリらは、様々な定義や解釈

がある「コミュニティ」について、「地理的境界内の特定の文化的背景を介して経済的および社会的に織り交ぜられた個々のメンバーで構成されているもの」とし、CBT を通したコミュニティ開発は特定の地域文化と知識をベースに開始する必要があるとしている (Giampiccoli, Jugmohan and Mtapuri,2014:660)。さらに、CBT の能力開発は、観光の技術的なスキルを超えて、より一般的なコミュニティ開発の課題を含めた、より広範なアプローチを組み込む必要があると指摘している (Giampiccoli, Jugmohan and Mtapuri,2014:664)。これらの議論を踏まえると、CBT をより理想的で、実行可能なものにしていくためには、特定のテリトリーや文化を持つコミュニティの開発がまず必要であり、CBT を実践するための前提条件構築の取り組みとして、地域の文化や知識をベースとした幅広く中長期的な支援が必要であると考えられる。

国連が 2015 年に採択した持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs) への関心が示すように、持続可能な開発は世界的な目標となっており、CBT の果たす役割は、今後重要度が増していくものと考えられる。そのため、地域の文化や知識を重視した幅広い取り組みを可能とする中長期的な支援体制のあり方について考察することが、今後の CBT や持続可能な観光の推進にとって必要になると考えられる。そのような中で、本稿では、CBT の推進の支援体制における大学の役割に注目し、その可能性について考察することとした。

事例として取り上げたバイーア州立大学の「カブラとその周辺のコミュニティ・ベース・ツーリズムプロジェクト」は、大学周辺の 17 の地区を対象とした CBT 推進の取り組みである。本研究が注目するのは、多分野連携的かつ学際的な (multidisciplinary and interdisciplinary: multidisciplinary and interdisciplinary) チームによる地域全体への幅広い支援体制である。この

プロジェクトでは、地域の歴史・文化の研究、文化活動、地域の初等・中等教育機関との連携活動、CBT ルートの開発、ツアー・オペレーターへの養成支援、デジタル技術を使ったコンテンツづくり、コミュニティとの知識共有や議論の場となっている継続的なエンカウンター開催など、対象地域と連携した多面的で幅広い取り組みが行われている。それ自体持続可能な地域開発となっている事例の取り組みは、CBTの支援体制のあり方や今後の持続可能な観光の取り組みにおける大学の役割の可能性を考察する上でも示唆的であると考えられる。

考察にあたっては、CBTやプロジェクトについての文献調査とともに、現地調査¹⁾とメールでのインタビュー²⁾をもとに行なった。

§ 2 ブラジルのコミュニティ・ベースド・ツーリズム

ブラジルにおける観光分野への一般的関心は、マストゥリズムであり、特に豊かで多様な自然を生かしたリゾート型ツーリズムへの期待が大きい。ブラジルはラグジュアリーツーリズムも盛んであり、富裕層や豪華客船を利用した観光客を誘致するマストゥリズム型振興政策が主流である。しかしブラジルでは、並行して、社会問題の解決を目指した観光分野の取り組みも行われてきた。ラテンアメリカでは、貧困や格差、社会的排除などの社会問題解決の手段として、NGOや中央政府、自治体の支援のもとで発展してきた経緯がある。特にブラジルでは、連帯経済の取り組みとしても、コミュニティを活動の主体としたCBTが推進されてきた。

ブラジルにおいて、2000年代から連邦政府が力を入れていたのが、社会政策としての観光政策である。ルーラ政権下(2003年～2011年)では、社会問題の解決や社会包摂を図るため、連帯経済の考え方を重視し、観光分野でも連帯経済をベースとしたプロジェクトを策定し、実施を

支援してきた。連帯経済の概念は、「オルタナティブな経済を目指す中、20世紀末から南欧諸国やカナダを中心に社会的経済や社会的連帯経済の議論を通じて用いられるようになった(幡谷,2019a:i)」。ラテンアメリカにおける連帯経済は、「グローバル化時代の人々の暮らしを支配する新自由主義に対する抵抗運動としてのオルタナティブな経済・社会様式の実践として出現していた(幡谷,2019b:13)」。ブラジルでは、「1980～90年代の経済危機によって雇用が失われ、多くの人々が社会的に排除されていくなかで、労働者・小規模生産者など経済的に弱い立場に置かれた人々が、生活と生業を回復させるために「連帯」して立ち上がったことに端を発する(小池,2014:76)」もので、NGO、協同組合、財団、労働者自主管理企業などが、市場や国家に代わり、事業や雇用を創出している。ブラジルの連帯経済の代表的論者であるパウル・シンジェルは、連帯経済の重要なコンセプトを、協同、連帯、自主管理、結果の公正な分配、能力開発、開発のプロセスにおける全員の積極的参加、環境への責任感などとしている(Singer,2002)。

国民経済の中では活動領域が限定されているが、ルーラ政権やルセフ政権では、政府も連帯経済を積極的に推進してきた。2003年にルーラ政権下で創設された連邦政府観光省(Ministerio do Turismo: MTur)では、観光が地域の発展や雇用、収入の創出を誘発するとして、人間開発指数(HDI)の低い地域への投資を優先的に実施してきた。青少年に対する労働市場参入のための訓練や関係するプロジェクトの支援も行われ、それまで観光に関係のなかった地域での、持続可能な開発のための研究や社会プロジェクトも奨励された(MTur,2007)。「国家観光計画(Plano Nacional do Turismo: PNT)」により、地域観光開発および社会包摂プロジェクトが促進されてきた中で、特に注目されたのが、CBTである。

MTurはCBTを、「連帯経済、アソシエーショ

ン主義、地域文化の評価の原則に基づいた地域開発の1つのモデルで、主に、観光活動によるこれらの利益を自分のものにするため、地域コミュニティが主役を演じる一つの方法である」と定義している (MTur, 2008: 1)。2008年に国家観光開発プログラム局によって行われた投資金額は、合計17億リアル(約8.5億ドル)に達する。TBCプロジェクトの2008年の公募により、50近くの提案が、支援対象として採択された。この提案は2008年にMTurが出版したカタログ『コミュニティ・ベースド・ツーリズム (Turismo de Base Comunitária)』に掲載されている。2008年～2009年に、合計42のプロジェクト(内、39件がNGO、3件が公的機関によるもの)が正式に承認され、合計700万リアルの投資が行われている (MTur, 2010: 26)。

2009年にMTurから出版された『コミュニティ・ベースド・ツーリズム 視点の多様性とブラジルの経験 (Turismo de Base Comunitária diversidade de olhares e experiências brasileiras)』に収録されているマルドナードの「ラテンアメリカにおけるルーラル・コミュニティ・ツーリズム」では、CBTは、ラテンアメリカの近年の現象であり、その起源は1980年代半ばに遡るとしている。また、CBTが注目され、推進されている現象の要因として、第1に、世界市場の需要における文化観光と自然観光への流れへの圧力を挙げており、結果的に農村コミュニティや先住民コミュニティが、彼らの自然財や文化財に対する市場の影響力が増大するという問題に直面するようになり、そのため多くの環境NGOは、CBTが、自然資源、環境、および地域の生物多様性の保全のための実行可能なオプションであると考え、奨励していると指摘している。第2の要因は、コミュニティの経済的ニーズ、労働上のニーズである。ラテンアメリカの貧困率は高く、貧困層は農村部に集中している。特に先住民の状況は悪化しており、この問題

に対応する必要があった。他に、小規模および零細企業が地域の経済発展と国内の観光事業の多様化において果たす役割が大きいことなども理由に挙げられている (Maldonado, 2009: 26-28)。

そのため、CBTで最初に取り組みしたのは、環境保全地域、沿岸地方などで実践されるルーラル・コミュニティ・ツーリズム (Turismo Rural Comunitario : Rural Community Tourism) である。貧しく経済的資源が不足している先住民コミュニティや農村のコミュニティが対象となった。近年は、都市部の経済的社会的に脆弱なコミュニティへのCBTの導入にも関心が高まっており、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、またアルゼンチンやウルグアイなどのラテンアメリカ諸国でも実践が見られる。例えば、リオ・デ・ジャネイロでは、サンタ・マルタのスラム (ファベラ : Favela) コミュニティのツアーやNGOのモリーニョが提供しているキロンボ地域のルートなどが存在する。バイーア州でも、カラファテ、アルト・デ・カブリート、プラッタフォルマなどの地域での取り組みが見られる。

§3 バイーア州立大学による「カブラとその周辺のコミュニティ・ベースド・ツーリズム・プロジェクト」

3-1 プロジェクトの体制

「カブラとその周辺のコミュニティ・ベースド・ツーリズム・プロジェクト (Projeto Turismo de Base Comunitária no Cabula e entorno : Projeto TBC Cabula)³⁾」は、2010年から、バイーア州立大学 (Universidade do Estado da Bahia : UNEB) の多分野連携的かつ学際的なチームにより、研究、教育、学外活動の全ての領域を網羅する取り組みとして、企画、実行されてきた。プロジェクトは、バイーア州都・サルバドール市にある旧カブラ・キロンボ地域である大学周辺の17地区⁴⁾ (Arenoso, Arraial do Retiro, Beiru, Cabula, Doron, Engomadeira, Estrada

表1 プロジェクトの体制

| | | | | | | | |
|----------------------------|---|---|-----------------------------------|------------------------|----------------------------|-----------------------|---------------------------------------|
| プロジェクトの テーマ軸(チーム 編成) | 1)地域と都市 空間 | 2)環境、社会的 エコロジー、エコ ツーリズム | 3)レジャー、 スポーツ、エ ンターテイメ ント | 4)教 育、養 成、市 民 | 5)コミュニ ティのコミュ ニケーション | 6)記憶、 歴史、遺 産、文化 | 7)教育テク ノロジー |
| | 8)デジタル社 会包摂 | 9)協同組合制 度、連帯経済、社 会的技術、イノ ベーション | 10)デザイン とサステナビ リティ | 11) CBT | 12)集团的 健康 | 13)公共 政策 | 14)言語と アフロ文 化、アフロ ブラジル文 化 |
| 学内連携(学 部) | 1)観光・ホテ ル経営 | 2)コミュニケー ション | 3)都市計画 | 4)法学 | 5)経営学 | 6)文学 | 7)教育学 |
| | 8)デザイン学 | 9)社会科学 | 10)看護学 | 11)歴史学 | | | |
| 学内連携(大 学院) | 「教育と現代性(地域開発、知識マネジメント、公共政策)」プログラム、「知識普及(マルチ機 関・分野)」プログラム | | | | | | |
| 学内連携(専 門施設) | 公共政策と連帯経済の協力・活動拠点/民衆協同組合・技術インキュベーター | | | | | | |
| 財政支援機関 | バイーア州研究支援財団 | | 国家科学技術開発評 議会 | | 高等教育機関レベル向上コーディ ネーション | | |
| 連携機関 | 初等・中等・高 等教育機関 | 市町村ネットワ ーク機関 | 地域・州立・国立・国 際機関 | 対象地域の 代表機関 | 法律関係 者 | 他大学 | |

(Silva, 2013a:13-16 およびポータルサイトをもとに筆者作成)

das Barreiras, Fazenda Grande do Retiro, Mata Escura, Narandiba, Novo Horizonte, Pernambucoés, Resgate, Saboeiro, Saramandaia, São Gonçalo do Retiro, Sussuarana) のコミュニティとともに、地域の持続可能な開発を目指すものである。キロンボ (Quilombo) ⁵⁾ とは、アフリカ起源の逃亡奴隷によって形成されたコミュニティ(集落)のことで、カブラ地区とその周辺の地域が昔キロンボであった地域に該当する。対象の17地区の人口は合計約50万人で、社会的に脆弱な黒人の若者が多い地域である。

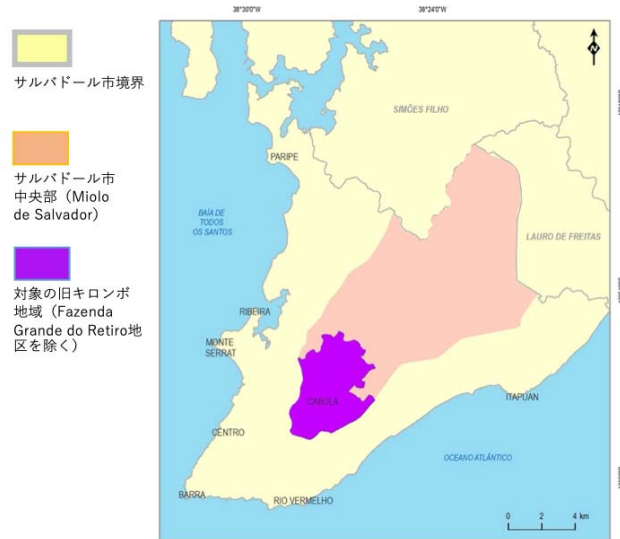
プロジェクトは、「記憶、歴史、遺産、文化」など14のテーマ軸のチームで編成されている。ボランティアや17地区の住民も含まれており、初等・中等・高等教育機関、地方自治体、国内外ネットワーク、旧キロンボ・カブラコミュニティの代表者などと連携した取り組みになっている。学部内では、観光・ホテル経営学分野だけでなく、教育学や看護学など11分野が参加しており、教員だけでなく授業や研究を通して学生も参加している。また大学院の「教育と現代性(知識マネジメント、地域開発、公共政策) Políticas Públicas, Gestão do Conhecimento e Desenvolvimento Local, em Educação e Contemporaneidade : PPGEduc」 「知識普及

(マルチ機関・分野) Doutorado Multi-Institucional e Multidisciplinar, em Difusão do Conhecimento : DMMDC)のプログラムも参加しており、学外活動のためのテーマ別拠点の1つである公共政策と連帯経済の協力・活動拠点(Núcleo de Cooperação e Ações em Políticas Públicas e Economia Solidária : COAPPES)にある民衆協同組合の技術インキュベーター: Incubadora Tecnológica de Cooperativas Populares : ITCP)も連携している。さらに、国内外の大学とも連携関係にある。財政的には、バイーア州研究支援財団(FAPESB)、国家科学技術開発評議会(CNPq)、高等教育機関のレベル向上コーディネーション(CAPES)などによる支援を受けている(Silva,2013a:13-16)。これらの体制を示したのが表1である。

3-2 旧キロンボ地域と地域文化の評価

サルバドール市⁶⁾は人口がブラジルで3番目に大きい都市であるが、その人口の多くが貧しいアフリカ系ブラジル人である。植民地時代の始まりには先住民が住んでいたが、その後アフリカ大陸から奴隷として黒人が多く送り込まれるようになった。歴史的には地域発展、都市開発、観光発展からは無縁の周辺化された地域であっ

図1 サルバドール市とプロジェクトの対象地域の位置



出典：Mascarenhas et al. 2019（筆者により一部加工）

た。失業、基本的な公共サービスの欠如、不安定労働などの社会経済的問題は、サルバドールの大都市圏全体に見られるものである (Filho et al, 2011:3)。サルバドール市観光公社 (SalTur)やバイア州観光局 (Setur)では、マストゥリズムの政策や計画が優勢である。現在 CBT の取り組みに対する支援はほとんど行われていない⁷⁾。

プロジェクトの対象の 17 地区は、サルバドール市の中央部 (Miolo de Salvador) に位置する (図 1、図 2 参照)。サルバドール市最大の人口約 5 万 4 千人を有するペルナンブエス地区も含まれているが、黒人の比率が一番高い地区でもある。18 世紀から 19 世紀 初頭に、この地域では逃亡してきた奴隷たちが住むようになり、キロンボ・カブラと呼ばれてきた。その後権力者の所有地となり、また分割され売買されていったが、1940 年代までは緑に覆われたオレンジの生産地であった。カブラ地域はまた、黒人による抵抗運動や文化的・社会的デモンストレーションの舞台でもあった (Martins and Souza, 2013: 269)。アフロ文化を守るための社会運動では、

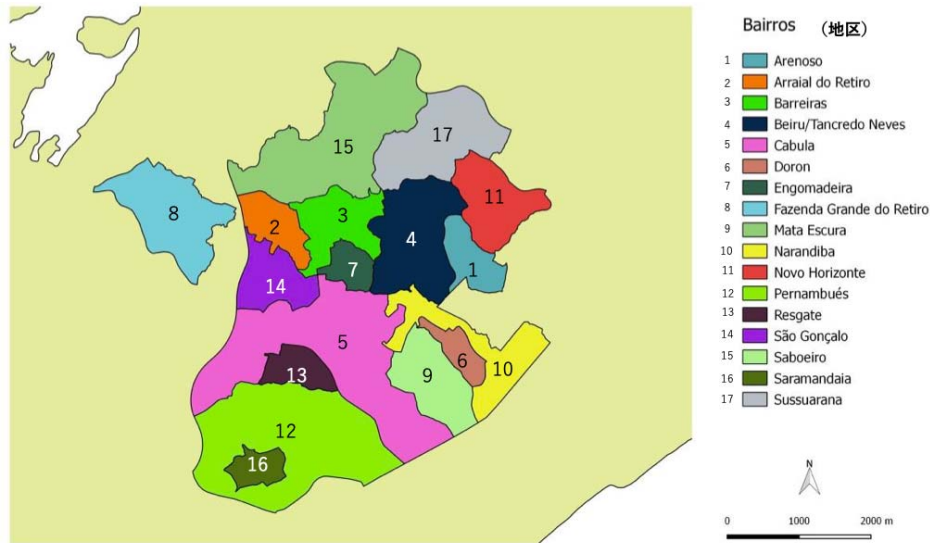
Artebagaço Odeart、Associação Mundo Negro、Quilombo Educacional do Cabula などの NGO による活動が見られた (Oliveira and Souza, 2014:5) 1960 年代からサルバドール市で不動産の分譲や団地の建設が爆発的に進み、カブラ地域でも都市化が進んだ。

現在、地域は私利益を目的とする企業などの不動産投機の増加に伴い、社会的および環境的な問題に苦しんでいる。地域では、ほとんどの住居が違法に建設されているため、人々の密集した無秩序な場所となっており、インフラ不足の問題もある。この状況が、利益を求める不動産投機の圧力に拍車をかけ、人々を撤退させやすい構造を生み出している (Alves et al, 2018:3-4)。

「カブラ地域は、時間の経過とともに、キロンボの空間から住宅と不動産資本の空間へと大きく変貌を遂げ、地域はその状況に苦しんできた。テリトリーの喪失と伝統的住民のアイデンティティの危機は、この空間の主な特徴となっている (Oliveira and Souza, 2014:10)」。

そのような中で、プロジェクトで重視された

図2 プロジェクトの対象の17地区



出典 : Matins et al. 2017 (João Soares Penaによる作成・筆者により一部加工)

のは、自主管理、ツーリズム編成の基礎としての地域の文化や環境、地域アイデンティティの評価、ネットワークや協同、連帯などの重視である。プロジェクトは連帯経済の原則に基づいて企画運営されており、単なる CBT の実践が目標となっていない。そのため、コミュニティにおける協力・連携のソーシャルネットワークの形成、集団による創造的で革新的な問題解決、有形・無形遺産の評価、先住民やアフリカ系ブラジル人の人々の民族知や実践知に基づく知識や社会的技術の編纂、共存なども目標とされている。プロジェクトのコーディネーター(代表者)であるフランシスカ・デ・パウラ・サントス・ダ・シルバ (Francisca de Paula Santos da Silva) 教育学部教授らの CBT と従来の観光の特徴の比較によっても、プロジェクトの性格がわかる (Silva et al. 2016 (表 2 参照))。コンチらは、連帯経済と CBT の間には、理論的基盤、歴史的統合プロセス、原則などにつながりがあり、共通項は、内発的な動きとしての「自主管理」、共同作業、共通の利益を優先する「協同」、地元の文化の評価な

どの原則であると指摘している (Conti et.al.2018:11-13)。

連帯経済をベースとする取り組みでは、住民の自主管理能力の開発や地元文化の評価、地域内のネットワークづくりや共同作業、協力体制の構築などが重視され、必然的に地域全体の開発を促すものとなっている。地域の文化を掘り起こし、評価をし、知識を共有することはキロンボ地域が置かれた困難な状況を克服し、地域住民をエンパワーする有効なアプローチであると考えられているため、地域文化についての評価や知識の共有は、特に力が入られてきた。

もちろんそれは、CBT の観光資源に結びつくものである。CBT の概念や価値を住民に理解してもらうため 2012 年にコミュニティの人々や一般に向けて発行した『CBT についての形成・情報の入門書 CBT の ABC』のブックレットでは、CBT の主要な観光資源は、地域の生活様式、つまり、コミュニティの知識、味、制作物などによって豊かに形成された社会的、文化的、歴史的な記憶であり、例えば、口伝の歴史、歴史遺産、

表2 コミュニティ・ベースド・ツーリズムと従来のツーリズムの特徴

| 従来のツーリズム | コミュニティ・ベースド・ツーリズム |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| 企業の利潤をベース | コミュニティの人々の利益の共有を重視 |
| 商品、製品、呼び物、アトラクション、特性を無くすものとしての文化と環境 | ツーリズム編成の基礎としての文化と環境 |
| 文化の画一化 | 地域アイデンティティの評価 |
| セクター的、個別的、競争的、企業経営的、中央集権的な組織 | ネットワーク、集団、協同、参加、連帯、共有における組織 |
| 市場、競争の原則 | 連帯経済、フェアトレードの原則 |
| 分割、細分化された管理 | 自主管理 |
| ツーリズム開発プロセスでのコミュニティの放棄 | ツーリズム開発プロセスでのコミュニティ主体 |
| 経済成長、不動産投機に焦点 | 地域の持続可能な開発に焦点 |

出典：” Turismo de Base Comunitária no antigo Quilombo Cabukalma Proposta Socioconst” (Silva et al. 2016:83-84)

一部を抜粋

文化遺産、地区の起源、民衆の知識、地域の一般的な食べ物、祭りや他の文化的行事や宗教的行事、音楽、踊り、文化集団やレクレーショングループ、フェスティバル、記念碑、建築物、フリーフェア、社会的プロジェクト、経済活動、自然面などのような、真正性がある、ビジターに有意義な体験を供給することができるものであると示している(Silva and Coimbra de Sá eds. 2012:13)。

3-3 エンカウンター

「CBT と連帯経済のエンカウンター (Encontro de Turismo de Base Comunitária e Economia Solidária : ETBCES)」は、プロジェクトの一環として、様々な社会的テーマを統合し、プロジェクトを強化する目的で組織された。講座やワークショップ、展示などを通して、コミュニティとの知識の共有を進め、プロジェクトの可視化や文化活動の推進にも注力している。また対話のための空間を生み出すことで、地域の人々の出会いを生み出し、コミュニティと学術分野の接近を目指すもので、「出会い」の意味を持つ「エンカウンター」の名称を使用している。そのため、大学関係者だけでなく、初等・中等・高等教育の学生、コミュニティのリーダー、観光分野のフォーマルな組織、NGO、市民社会組織、文化アソシエーション、アーティスト、音楽・演劇・手工芸・グラフィティなどの芸術的表現のグ

ループにも幅広く参加を呼びかけている。「観光と連帯経済に結びついた文化と生産の展示 (Mostra de Cultura e Produção Associada ao Turismo e à Economia Solidária : MCPATES)」, 「日常の文化的アートの展示 (Mostra Cultural Arte no Cotidiano)」環境と健康のフェア (Feira de Meio Ambiente e Saúde : FMAS) 「音楽、教育、抵抗のエンカウンター (Encuentro de Música, Educação e Resistência) なども同時開催されている。

2011年7月6日の第1回のETBCESでは、370人が参加した。地域コミュニティや学術コミュニティからの要望で、第2回のエンカウンター(2012年7月3日～8日)は日程を6日間に拡大し、607人の参加者を集めた。第3回エンカウンター(2013年7月10日～14日)は、606人が参加した。雨やストライキなどの逆境の中でも人数が増え、第3回までのETBCESはUNEBのキャンパスIで開催されたが、地域の要求や大学側の参加制限要請もあり、対象となる聴衆の社会経済的状況を考慮して、第4回からは17の地区で、巡回的に開催することが決定された。第4回はペルナンブエス地区のコミュニティに受け入れられ、アリオマール・バレエイロ大臣学校で開催された。そのため、学術関係者と近隣の人々がより密接に交流できるようになった。これらのエンカウンターでは、オルタナティブで責任感がありサステナブルで連帯的な都

表3 ETCES参加者 (2011年~2016年)

| 参加者 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 |
|-----------|------|------|------|-------|-------|-------|
| 大学教員・研究者 | 10 | 74 | 64 | 70 | 75 | 82 |
| 初等教育機関の教員 | 5 | 10 | 18 | 30 | 45 | 43 |
| 学部生 | 12 | 29 | 41 | 44 | 37 | 69 |
| 大学院生 | 263 | 60 | 32 | 35 | 52 | 58 |
| 専門家 | 29 | 434 | 430 | 312 | 340 | 330 |
| その他 | 51 | 0 | 21 | 625 | 722 | 672 |
| 合計 | 370 | 607 | 606 | 1,116 | 1,271 | 1,254 |

出典：ETBCESのウェブサイト
<http://www.etbces.net.br/historico> (一部抜粋)

市ツーリズムの旅程 (Roteiros Turísticos Urbanos, Alternativos, Responsáveis, Sustentáveis e Solidários : RTUARSS) が提案されていたが、2回目以降は、地域住民によって行われることになった。市と州の教育ネットワークを通して、教師と生徒の参加がかなり増加していったことから、データはコミュニティによって集計され (表3参照)、分析されるようになった。プロジェクトチームは、自治体および州立学校の生徒の参加が増加していることを考慮して、徐々に地域コミュニティで対応できるようにしている。第9回のテーマは、「連携のネットワークと持続可能な地域開発」で、2019年8月14日~18日にエレナ・マガリャエス州立学校で開催されている。プログラムには、高校生や地元住民によるアート、文化的プレゼンテーション、講演、インタラクティブな話し合い、論文審査、研究発表、円卓会議などがあり、同時開催の「環境と健康のフェア」ではワークショップや展示などが行われた。また、2018年から始まった「音楽、教育、抵抗のエンカウンター」では、連携する学校のアーティストの参加があり、レゲエ、サンバ、ヒップホップなどについての議論も行われた⁸⁾。

3-4 地域の学校と連携した取り組み

プロジェクトでは、CBTの基礎となる地元の文化や歴史を知るための教育の一環として、初等・中等教育機関との連携も進めている。アレノッソ地区のノルマ・リベイロ州立学校による「ア

レノッソコミュニティの文化的マーク：地名研究」というタイトルで行われた取り組みでは、語彙学と地名研究の基礎に関する勉強の後、生徒たちは地区内の街路の名前の由来を研究した。この取り組みは、ブラジルの言語学協会 (ABRALIN)の大会でも発表されている (Alves, A)。CBTの原則を知るための取り組みとしては、ヴィスコンデ・デ・イタパリカ州立学校による庭園と菜園を校内で行うプロジェクトがある。プロジェクトのポータルサイトで、アルベスは、「これらの活動は、コミュニティの知識や実践を学校でも共有するだけでなく、どんな公共政策が地域に必要なかといった議論をするためのものとなっている (Alves, B)」と述べている。

CBT開発の計画・実行能力を高めるための取り組みとしては、州立学校との連携でワークショップが行われている。パートナー校は、エドヴァルド・フェルナンデス学校、ヘレナ・マガリャエス学校、ゴベルナドール・ロベルト・サントス学校、アリオマール・バレイロ大臣学校などで、先住民グループとアフリカ起源の人々の遺産を特定し、このマッピングに基づいて、現実に合わせてルートを考える取り組みを行った。この活動ではコミュニティの歴史のおよび文化的遺産の特定だけでなく、彼らが改善を必要と考えるものが、政府によって支援されていないことにも焦点が当てられた。この取り組みから約30のオルタナティブな旅程が作成された。これらのワークショップでの経験により、さまざまな科目の教師同士の交流が可能になり、学校のある地域に関する研究開発への関心が高まったと報告されている (Bóas et al. 2016)。

また2012年、財団から承認された「CBTカブラプロジェクト：学校との知識の構築」「CBTカブラプロジェクト 学校におけるデジタルコンテンツ」では、4つの公立学校がパートナーとなっている。この取り組みの背景には、仕事や収入の見込みがなく、自尊心が低く、脆弱な状況に

ある青少年の存在や、地域の歴史的背景についてのコンテンツの欠如がある。若者を魅力的な方法で日常生活、社会的現実、地元の歴史に近づけることは、学習の可能性を生み出すことでもあるため、ロール・プレイング・ゲーム (RPG) の活用が考えられた。取り組みの目的は教育ツールとしてデジタルゲームのRPGを開発および応用することで、具体的目標として、「①地域の歴史的背景を詳しく整理する、②地域に現存する社会的、文化的、環境的、経済的側面を発見する、③教育のためのRPGの意義について話し合う、④CBTで形成可能なデジタルネットワークで使用するRPGモデルを作る、⑤ゲームを応用し、その結果を分析する、⑥ゲームに参加した生徒と一緒に結果を整理し、改善し、教育での使用に関心のある人が利用できる教材を準備する」が挙げられている (Alves et al. 2016)。

2016年の取り組みでも、高校生を対象として、「旧キロンボ・カブラのCBTの教育に関する知識を構築し、RPGのデジタルゲームを教育ツールとして適用する」ことを目的とする取り組みが行われた。目標は、生徒の育成のために、教育ツールとしてRPGを活用しながら、CBTのための教育において知識を構築することで、①地域に現存する歴史的、社会的、文化的、環境的、経済的側面を発見する、②地域とCBTを結びつける、③地域におけるCBTのための教育についての知識を構築する、④CBTの人材育成のためのRPGの開発と活用が目指された。アドベンチャー1「カブラとその物語：バトル」というゲームのアプリケーションは、教師や専門家の助けを借りながら、7人の高校生の参加から始まり、開発された。WhatsAppアプリケーションの機能を活用してグループをまとめたり、一部の生徒は技術講座を受講するなどもした。2016年11月9日～13日に16歳から20歳までの地域在住の高校生を対象にゲームの実験を実施している。この取り組みは、CBTの組織化のために学生を

巻き込んでいくだけでなく、知識の構築に有効であったとしている (Alves et al. 2018)。地域の学校と連携した教育分野の取り組みでは、約2,000人の生徒が参加している (2019年9月24日シルバ教授へのメールインタビューによる)。

プロジェクトでは、デジタル技術を応用した他の取り組みとして、バーチャル・ミュージアム、ウェブ・ラジオなどがあり、このRPGも含めてプロジェクトのポータルサイトのインタラクティブ・コンテンツのコーナーからアクセスできるようになっている。

3-5 旅程 (ツーリズム・プログラム) の開発

旅程開発では、住民たち自らがCBTのプロセスに関与するすべての人をつなぎ、日程の詳細について様々な側面から考えることが必要となる。具体的なビジターへのサービスとしては、ガイド、飲食物提供、文化的表現、地域の祭り、家族やコミュニティによる宿泊所の供給、工芸品の販売、イベントのためのスペースの賃貸、レクレーション、教育、健康衛生などのボランティアなどが挙げられている (Silva and Coimbra de Sá eds, 2012)。旅程の開発にあたっては、車座での対話、ワークショップ、講座、技術的な分野でのコミュニティ訪問、研究旅行などが行われている。人々の歴史や祖先のこと、放棄されていた遺産について、コミュニティと一緒に知識を構築する取り組みが行われたが、新しい世代のためにも必要だという認識があり (Silva et al. 2016: 88)、様々な実験も行われている。

2011年には、エストラダ・ダス・バレイラス地区の「ブラジルの環境と再生可能天然資源研究所 (Ibama)」の野生動物スクリーニングセンターへの訪問と地元に住むインド人アーティストがガイドを務める手芸展示が、ランチとセットになっている旅程も考案された。2011年12月17日、2012年7月5日、2013年2月9日、2014年11月16日には、「カブラ菜園」関係の

旅程が試行されている。2012年と2013年に旅程に含まれるのは、カブラ I 市立学校への訪問で、旅程にはアフロ系宗教の教会の訪問と関係者との会話も含まれていた。2014年には、「マタ・エスクラ菜園トレイル」の旅程で、NGOの「自然の保護と市民権の実践 (PNPC)」の若者がガイドを行なっている (Silva et al. 2016:88-89)。2012年7月8日に開催された旅程「マタ・エスクラの街角」は、第2回 ETBCES プログラムの一環として、エンカウンター、話の輪、ワークショップなどに参加した住人によって取り組まれた。地域の工芸職人、料理人、詩人、画家などのメンバーによって企画された。ペルナンブエス地区とサラマンダイア地区の旅程開発では、「テーブルへの菜園」「コミュニティ菜園」というテーマで、2013年4月12日と2014年11月15日にエンカウンターのワークショップとして実施された。「私たちの菜園」というスローガンで T シャツを作り、庭に関連したテーマの手工芸品の展示や地元の手芸品と新鮮な野菜の販売もされている。旅程は、近隣住民の家でのベジタリアンランチで終了し、ここでは詩の発表会も行われた (Silva et al. 2016:88-89)。

旅程開発の取り組みは、プロジェクトチームの地域で開催した対話やワークショップの成果であり、ETBCES でも発表されている。2010年以降、約150の旅程が提案されている (2019年9月24日シルバ教授へのメールインタビューによる)。旅程開発でも、自主管理の原則が生きており、地域文化や環境をベースにした工夫がうかがわれる。

3-6 アート文化集団：CULTARTE の取り組み

「CULTARTE」は、旧キロンボ地域の様々な地区の居住者の工芸職人の自主管理集団で、2012年の第2回エンカウンターETBCES と同時開催された「第2回ツーリズムと連帯経済に結びついた文化と生産の展示会 (MCPATES)」

写真1 CULTARTEのメンバーとシモン教授(左端)シルバ教授(中央)於：大学内の展示・販売・研修スペース



筆者撮影

で創設された。グループは工芸職人、アーティスト、料理分野の人々で構成されている。集団活動の「内部規定」や文化とアートを合体させた「CULTARTE」という名称は、技術インキュベーターとのミーティングの中で考えられた。グループの製品の商業化、マーケティングのコンディションの向上を目的として、製品の展示や商業化の空間の追求、集団的利益のためのワークショップや研修、経験や知識の交流などが取り組まれている (写真1参照)。現在は、ポータルサイトを通して販売をする研究をしているという。現在は22人の工芸職人がメンバーとなっているがほとんどが女性である。また、メンバーのほとんどが、40歳以上の他の収入源を持たない黒人または混血である。(Pereira and Silva, 2016)

メンバーのジョアニス・マルケス (Joanice Marques) は、「それまで大学の敷地に入ったこともなかったが、ここで色々勉強できるようになった」と話す。アルダリス・コスタ (Aldalice Costa) は、パッケージを作っている。工芸に出会い、グループで活動するのが嬉しいという (2019年7月26日のインタビューによる)。ネイア・エステバン (Neia Estevan) は、CBTにつ

いて「儲けだけでなく、観光客が訪れている地域の現実を知ることだ」と思うと、コメントしている (Pereira and Silva, 2016)。CULTARTE の取り組みは、CBT での起業や女性へのエンパワーメントを目指したものであるが、CBT についての理解を深めるとともに、大学との連携を強め、共同作業や文化活動の価値などを体験する場でもあると考えられる。取り組みやメンバーたちの声は、ポータルサイトの CULTARTE のコーナーからアクセスできるが、工芸職人や文化的施設などを表示した「文化地図 (mapa cultural)」も作られており、インタラクティブ・コンテンツのコーナーからアクセスできるようになっている。

グループの形成においては、デザインコースで指導するシド・アビラ (Cid Avila) 教授やアナ・ベアトリス・シモン (Ana Beatriz Simon) 教授とその学生の参加による、製品展示のためのロゴや本の製作などの取り組みがあった。プロジェクトは、デザインコースの「美学」「コンピューターグラフィックス」「グラフィック表現 III」「写真」「プロジェクト1・方法論と実践」「写真の歴史 II」「デザインと新しいテクノロジー」「デザインとサステナビリティ」「デザインとユーザビリティ」などのカリキュラムを通して、ビジュアルアイデンティティ、グラフィック作品、包装・パッケージ・トランスポート、訪問カード、家具、粘着テープなどのプロジェクトが組み込まれた。デザイン分野では、他にもポータル・ウェブサイト⁹⁾の創設などの取り組みがある (Silva, 2013b:303-304)。

3-7 コミュニティによる CBT の実施

観光客を受け入れた最初の CBT は、第 1 回 ETBCES の直後の 2011 年 7 月 7 日にペルナンブエス地区で実施されている。この旅程は、「バイア・イタカレのキロンボモデル農場のコミュニティによるペルナンブエス地区への第 1 回

写真2 旧キロンボ地域で説明を受けながら歩く CBT の参加者



筆者撮影

訪問」というタイトルで実施された。コミュニティが受け入れたビジターの中には、パラナ州クリチバ市からエコ社会経済の観点からカブラ地域のガバナンスの研究のために来訪した研究者もいて、2015 年 6 月 23 日から 7 月 7 日の間にカブラ地区に民泊している。現在までのビジターは、サルバドール市内やパイア州の他の地域、パラ州、セアラ州、アラゴアス州、セルジペ州、パラナ州、サンパウロ州、リオ・デ・ジャネイロ州、また、チリ、アメリカ、イタリアなどからも来ている。

カブラ地区で実施されている「キロンボ・カブラへの訪問¹⁰⁾」の旅程では、9 時にスタートするとすぐに地域住民のホストガイドと合流し、住宅密集地の全景を見渡せる場所で、この地域の歴史や現状について説明を受ける。住宅団地、広場、公立学校などにも訪問した後、テヘイロ (アフリカ系宗教・カンドンブレ¹¹⁾の祭儀場) へも訪問し、管理者 (司祭) などからアフリカ系ブラジル人、儀式、カンドンブレの社会的役割などについて説明を受ける。庭や聖なる植物なども見学する他、儀式に使う白い衣装に施されるフランス由来の刺繍などについても説明を受ける。説明は一方的でなく、自由に質問ができ、ビジタ

一との自由な会話が可能である。12時過ぎには、一般家庭で地域の家庭料理の昼食をとり、その後自由解散するという半日のコースである（写真2参照）。このツアーの料金の場合には一人35レアル（約1,300円）で、全てサービス提供者に支払われる。価格は、連帯経済のフェアトレード¹²⁾の原則に基づいて、また提供されるサービスの経費に応じて決められている。付き添うオペレーターは、助言や事後評価を行う。

オペレーター養成については、大学の技術インキュベーター(ITCP)が、CBTの普及に対応したオペレーターの育成にも貢献している。ITCPは、連帯経済の原則に基づいた管理モデルを実行するために大学内に創設されており、2018年時点でブラジル国内では、5つの地域で62のインキュベーターが存在し、ネットワーク化されている(Conti et.al.2018:7)。ペルナンブエス地区在住のロザネ・サレス(Rosane Sales)は、他大学で観光を学んだ。2012年に、シルバ教授がインタビューでCBTの話をしていてのテレビで聞き、是非自分もやってみたいと思い、CBTのプロジェクトチームへの参加を申し出た。その後、CBTオペレーターとして、ボランティアで活動している。サレスは、「既存の旅程を調査し、新しい旅程が増えるように気をつけている。法人やアソシエーションの形成や法令を理解してもらうことも含めて、オペレーターはコミュニティが提供する全てのサービスのトレーニングにも気をつけている(2019年9月19のメールインタビューによる)。

§ 4 事例の特徴とその意義

これらの取り組みの特徴は、プロジェクトのポータルサイトなどにも明記されているように、多分野連携的かつ学際的なアプローチになっていることである。例えば、プロジェクトでは、地域の学校と連携するなど、青少年の教育にも関わっている。教育学を中心に言語学、デジタル技

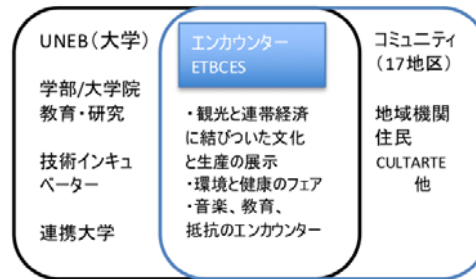
術分野などを巻き込んだ学際的なアプローチは、地域文化の評価、青少年による知識構築、能力開発や地域への愛着、自尊心の回復などを含む青少年層へのエンパワーメント、地域の教師間の協力関係の構築などにも寄与している。また、CULTARTEの集団活動は、能力開発やアイデンティティ回復などの女性へのエンパワーメント、ネットワークづくり、知識や文化の構築・共有、文化活動の促進、起業の促進などにつながっていると考えられるが、デザイン学科の教員や学生、技術インキュベーターも広く関わっている。これらの取り組みは、テーマ軸「デザインとサステイナビリティ」を生み出したが、デザイン学科は他にテーマ軸「コミュニティのコミュニケーション」のメンバーとともに、社会・空間・教育・観光のグループのビジュアルアイデンティティの取り組みにも参加している(Rodrigues,2013:193)。プロジェクトでは、バイア医療・公衆衛生大学(EBMSP)との連携で、健康や環境分野の取り組みも行われている。地域のセルフケア・プログラムなど、もともと内科からセラピーまで網羅した多分野からの取り組みをしていたEBMSPは、UNEBとの対話から一緒に「環境、健康、CBT」という取り組みを始めた(Nascimento et al.2013:253-254)。エンカウンターではこの連携の成果として「環境と健康のフェア」が開催されているが、ごみから食物まで幅広いテーマで取組みられ、地域環境や公衆衛生の向上、また知識の共有や住民の自主管理能力の向上に寄与している。

これらの多分野かつ学際的なアプローチをまとめ、支えているのが、毎年行われているエンカウンター(ETBCES)である。誰にでも開かれた知識構築・共有や議論の場であるエンカウンターを開催することで、知識や経験、問題点などすべてを可視化しつつ、研究や実践を体系化、総合化しながら、コミュニティとともに中長期的に活動できる体制をつくっている。このエンカウ

ンターでは、地域住民や初等・中等学校における知識構築の成果、文化活動の成果も発表され、地域の文化的芸術的才能も発掘されている。CULTARTE の製品や作品も同時開催のフェアで展示されており、伝統だけでなく、地域の文化が様々な形で評価されるようになってきている。また、開催自体により、住民の自主管理能力も開発される機会となっており、地域住民や地域機関の協力関係やネットワークづくりにも貢献している。住民たちの共同作業による CBT の旅程開発は、地域の文化や環境についての知識構築・共有やネットワークづくりに寄与しつつ、住民の自主管理能力や様々な能力を高めるものとなっているが、このエンカウンターでの場で発表され、試行されている。最初大学構内で行われていた ETBCES は各地区を巡回して、地域の学校で行われるようになってきている。多分野連携的かつ学際的なアプローチは、エンカウンターという形で、地域と大学が連携するテーマ統合のためのプラットフォームを形成し、取り組みを広げ、強化する構造を生み出していると考えられる(図3参照)。

以上のように、多分野連携的かつ学際的なアプローチは、エンカウターの開催を含む幅広い取り組みを生み出している。17 地区と大学の連携は 10 年におよび、その成果は、エンカウンターでの発表などを通して可視化されている。それは、ジャンピッコリらの指摘した CBT の実施において必要な前提条件である、コミュニティの能力開発に該当し、コミュニティ開発の重要な点である特定の地域文化や知識をベースとするものである。また、これらの取り組みは、単なる観光分野の開発ではなく、コミュニティが抱える課題や地域全体の開発に適した支援体制を生み出している。つまり、事例のプロジェクトは、ジャンピッコリらが必要と指摘していた「より一般的なコミュニティ開発の課題を含めた、より広範なアプローチ」を可能とする中長期的

図3 プロジェクトの構造



筆者作成

な支援体制になっていると考えられる。

その支援体制を可能にしているのが、プロジェクトの特徴である多分野連携的かつ学際的なアプローチである。アプローチが多分野連携的かつ学際的であるため、幅広く柔軟な取り組みが可能であり、その結果、地域全体で様々な分野の知識構築・共有が推進されるとともに、多方面での地域住民の能力開発に幅広く貢献する状況を生み出していると考えられる。多分野連携的かつ学際的な CBT 推進への支援・連携体制は、行政機関はもちろん NGO などの組織でも難しく、大学という機関ならではの側面がある。つまり、このような支援体制の実現は、多分野連携的かつ学際的なアプローチによる部分が大きく、CBT 推進のための支援アクターとしての大学の有効性を示唆していると考えられる。

また、これらの取り組みはコミュニティにだけメリットをもたらしているわけではない。大学関係者による研究は、コミュニティに還元されるが、コミュニティとの交流により、新しい研究の観点や連携体制を生み出すものとなっており、大学側にもメリットがある。ここでは全ての研究を取り上げていないが、多くの研究成果がそれを物語っている¹³⁾。地域文化の評価をベースとした研究は、持続可能な地域開発のために今後重要となる可能性が高い。また、CBT の推進に限らず、多分野が連携した学際的なアプロ

一は、現在の大学の教育・研究や地域との連携事業において求められているあり方でもある。

ここから見えてくるのは、CBT 推進における大学の役割であり、支援体制における大学の可能性である。観光分野は急速に成長している産業であり、今後ますます需要が増えていくと考えられるが、そのあり方によっては、生態系や文化、また社会全体に負の影響を及ぼす可能性も高い分野である。CBT は観光という形を取りながらも、地域の持続可能な開発が最終目的であり、持続可能な観光の一つとして、今後その役割が期待される。日本では CBT についての議論や研究は少ないが、2017 年に発刊した富士通総研経済研究所の『研究レポート No.449 観光を活用した地域産業活性化：成功要因と将来の可能性』（大平剛史）では、観光を活用した地域活性化に有効な形態としてコミュニティツーリズムに注目している。

国連による「持続可能な観光国際年(2017年)」の設定には、持続可能な開発目標 (SDGs) の目標の達成を目指す上でも、観光分野の果たす役割は大きいとの認識がベースにある。「持続可能な観光国際年」の公式ウェブサイト¹⁴⁾では、観光に求められる貢献について、①包摂的で持続可能な経済成長、②社会的包摂性、雇用、貧困削減、③資源効率、環境保全、気候変動、④文化的価値、文化的多様性、文化遺産、⑤相互理解、平和、安全保障の分野をあげている。持続可能な観光は、逆に言うと、このように多方面の観点から取り組むことが必要であり、そのためには、事例のように、多方面からの支援やアプローチが必要になると考えられる。

事例の CBT プロジェクトは、持続可能な観光を実現する上で不可欠な前提条件づくりの取り組みとなっており、その取り組み自体が、持続可能な地域社会の形成に資するものである。シルバ教授が述べているように、持続可能な地域開発は、もともとこのプロジェクトの目的でもあ

る (Silva,2013a:14)。それ自体地域の持続可能な開発にも貢献する持続可能な観光の支援モデルとして、多分野連携的かつ学際的なアプローチの可能性や意義は大きく、持続可能な観光の推進における大学の役割は、今後重要になってくるのではないだろうか。

§ 5 プロジェクトの現状における問題点や今後の課題

プロジェクトには問題や課題もある。全ての取り組みが成功しているわけではない。一番の課題は、今後どうツアーの実践を増やしていくのかであろう。CBT の実践は、コミュニティの自主的な意思や裁量、その能力にかかっているため、観光客の受け入れ体制にはまだ不十分な面がある。オペレーターは、「都市の生活モードが許さないため、まだコンスタントに CBT が実践されるようにはなっていない。コミュニティの人々は、週 48 時間以上働いており、週末には家の用事があるため、土曜日しか実施できない。都市部の CBT の実現は、コミュニティが私たちの提供してきたものを活用できるかどうかにかかっている。旅程の開発は進んでおり、ペルナンブエス地区のように、5 つ以上の旅程を提供するところもある。しかし、コミュニティはまだ CBT で生計を立てられる状況ではなく、そうするためには体系的な仕事の体制が必要とされる」と指摘している (2019 年 7 月 27 日のインタビューによる)。

また、プロジェクトの代表者であるシルバ教授は、「このプロジェクトを実行する過程で、政治家が関与する報復行為などの困難に直面した。他にも、大学関係者とコミュニティの人々の活動可能な時間帯が異なるため、地域住民が参加しにくい状況もあった。プロジェクトの継続性は、コミュニティのエンパワーメントにかかっている。今後さらに強化が必要なのは、大学とコミュニティの間の結びつきや居住者同志の結び

つき、ネットワーク。CBT トレーニングのワークショップを実施するための学校の支援、プロジェクトのモニタリング、インターンシップ、大学とコミュニティをより近づけるイベントやその他の活動に対する財政支援、行政のサポートなど」と述べている (Silvia et al.2016:19 および 2019年7月26日のインタビューによる)。

オペレーターのスレスは、「CBTの活動は複雑であるため、多くの課題があり、多くのスキルと信念、忍耐力、楽観的な見方が要求される。このプロジェクトの現段階での評価は難しいが、計り知れない可能性はある。CBTは疑いようのないツールであり、その多分野連携的で学際的な性格によって、地域や人々の開発のための引き金になるとわかっているし、信じている」と話している (2019年9月24日のメールインタビューによる)。ヤネスらは、CBTの取り組みについて、改善はゆっくりだったが着実に進んでおり、ほとんどのCBTプロジェクトがNGOのみによって主導されていた20年前や30年前よりも取り組みが成功していることは明らかであると研究論文で締めくくっている (Yanes,2019:19)。

事例のプロジェクトでは、数値化されたデータは少なく、また取り組みが多岐にわたっているため、全ての内容を十分考察することはできなかった。しかし、今後益々議論が期待されるCBTや持続可能な観光の研究において、一定の知見を示すことができたと考える。今後は問題点にも焦点を当てながら、引き続き研究課題としていきたい。

【注】

- 1) 2019年7月26日バイーア州立大学での聞き取り調査 (教育学部シルバ教授、デザイン学科シモン教授、ツアー・オペレーターでプロジェク

トメンバーのスレス氏、CULTARTEのメンバー4名、サルバドール市在住日本人デザイナー澤氏) 7月27日カブラ地域のコミュニティ・ベースド・ツーリズムへの参加及び関係者への聞き取り調査、7月29日サルバドール市およびバイーア州の観光関係機関、バイーア州の文化局での聞き取り調査、7月30日カラファテ地区のコミュニティ・ベースド・ツーリズム実施団体への聞き取り調査及び周辺地域の見学を中心とした現地調査を行っている。

- 2) 2019年9月24日・9月25日・12月8日プロジェクトの代表者シルバ教授、6月12日プロジェクトメンバーのシモン教授、9月19日・21日・22日・24日ツアーオペレーターのスレス氏、12月9日澤氏に対し、メールでのインタビューを行っている。

- 3) プロジェクトのポータルサイト

<https://tbccabula.com.br/quem-somos/o-projeto-tbc-cabula>

- 4) ここでの地区は、現地のポルトガル語で *bairro* (*neighborhood*) のことで、行政区や正式な住所ではなく、地元の人によって通常使われている呼び方であり、地域を区別するための範囲を指す。
- 5) 国立植民地化・農地改革研究所 (INCRA) の2013年のデータによると、ブラジルには、139のキロンボコミュニティが正規に記録されている。出典：Cézar N.,J. and D. Oliveira M. [2016] *Vivências diaspóricas em comunidades quilombolas: empoderamento, autorreflexão e novas sociabilidades na comunidade Rio dos Macacos, MATRIZES*, vol.10, No.3,2016, São Paulo
- 6) サルバドール (Salvador)は、2019年の人口推計約287万人、約3,860 km²、一人当たりのGDPは20.796リアル (2016年、約6,000ドル) ブラジル統計院 (IBGE) のウェブサイトによる)

- 7) 2019年7月29日 Saltur の Ricardo Noble 氏、Setur の Andreia Brandão 氏へのインタビューによる。
- 8) これらのプログラムについては ETBCES のウェブサイト (<http://www.etbces.net.br/ix-etbces-2019/programacao>) に掲載されている。
- 9) 以前 www.tbccabula.com.br のアドレスで広報されていたが、現在中断しており、間もなくデータへのアクセスができるようになる予定である(2019年9月24日のシルバ教授へのメールインタビューによる)。
- 10) 筆者は2019年7月27日にこの旅程のツアーに参加している。参加者は8名で、二人のオペレーターが付き添っている。テヘイロでは、儀式の部屋で皆車座に座り、ホストはビジターからの質問を受けたりしながら話が進められた。旅程の途中で、各自の意思による2度にわたる飲み物や軽食のブレイクがあり、ビジター同士の交流も行われた。(写真2参照)
- 11) カンドンプレ (Candomblé) は、「バイーア」地方で発展し、ブラジルの他の地域、とくに南東部の大都市にも広がったナゴ (ヨルバ系の人々の総称) の伝統に基づくアフリカ系宗教の一形態 (ブラジル日本商工会議所 (2005) 『現代ブラジル事典』新評論) で、主に低所得者層と中産階級から信仰されているとされている。約 200 万人が信仰しているとされ、テヘイロ (Terreiro) と呼ばれる場所 (教会) で儀式を行う。
- 12) フェアトレード (公平貿易) は、開発途上国で作られた作物や製品を適正な価格で継続的に取引することによって、生産者の持続的な生活向上を支える仕組みであるが、ブラジルではよりも広い意味で使われており、現在の経済システムを変更する制度として位置付けられている。生産者間の関係を含む広い
- 経済主体の間での公正な取引を意味し、それを通じて経済、社会、環境的に持続可能な社会の構築を目指す運動であり、制度である。出典：梅村誠エリオ (2017) 「フェアトレード 生産関係の変革」『抵抗と創造の森アマゾン 持続可能な開発と民衆の運動』小池洋一・田村梨花編著 現代企画社：240 頁。
- 13) 例えば、2013年に出版された『コミュニティ・ベースド・ツーリズムと共同組合主義 研究、教育、カブラとその周辺の学外事業をつなげる (TURISMO DE BASE COMUNITÁRIA E COOPERATIVISMO articulando pesquisa, ensino e extensão no Cabula e entorno)』では、対象地域の歴史や文化、産業、環境、健康、ポータルサイトの実践やコミュニティラジオの研究まで、取り組みに必要とされる研究や実践研究の成果など 26 本の異なるテーマの研究が掲載されている。他にも、エンカウンターでの発表論文や、大学院での研究論文、博士論文などが多数存在する。
- 14) <http://www.tourism4development2017.org> ウェブサイトには世界中の取り組みが掲載されている。

【参考文献】

- 大橋昭一 (2018) 「コミュニティ基盤ツーリズムについての諸論調：枠組と実践上の課題」『観光学』19 巻, 1-10 頁。
- 大平剛史 (2017) 「研究レポート No.449 観光を活用した地域産業活性化：成功要因と将来の可能性」富士通総研経済研究所。
- 小池洋一 (2014) 『社会自由主義国家 ブラジルの「第3の道」』新評論。
- 幡谷則子 (2019a) 「まえがき」幡谷則子編『ラテ

- ンアメリカの連帯経済 コモン・グッドの再生をめざして』上智大学出版,i-iv
- 幡谷則子 (2019b) 「ラテンアメリカの連帯経済」幡谷則子編『ラテンアメリカの連帯経済 コモン・グッドの再生をめざして』上智大学出版,2-21.
- Alves, K. (A) “Educação para o TBC, Turismo de Base Comunitária no Cabula e Entorno” (portal site).<https://tbccabula.com.br/cabula-acontece/dialogos-entre-educacao-e-turismo-de-basecomunitaria/387-educacao-para-o-tbc> (2019年9月26日閲覧)
- Alves, K. (B). “Educação Popular e Turismo de Base Comunitária, Turismo de Base Comunitária no Cabula e Entorno” (portal site).<https://tbccabula.com.br/cabula-acontece/dialogos-entre-educacao-e-turismo-de-base-comunitaria/376-educacao-popular-e-turismo-de-base-comunitaria-tbc> (2019年9月26日閲覧)
- Alves, K., F. and P. S. Silva (2016) "Jogo Role Playing Game (RPG) Digital para Formação em Turismo de Base Comunitária : Uma Experiência de EAD informal e Voltada para o Desenvolvimento de Tecnologia Social". <http://www.abed.org.br/congresso2016/trabalhos/287.pdf> (2019年9月26日閲覧)
- Alves, K., F.P.S. Silva and A. E. Matta (2018) "Educação para o Turismo de Base Comunitária, no Antigo Quilombo Cabula : Uso do Jogo RPG Digital como Mediador de Aprendizagem". <http://www.abed.org.br/congresso2018/anais/trabalhos/9405.pdf> (2019年9月26日閲覧)
- Amin, A. and Y. Ibrahim (2015) “Model of Sustainable Community Participation in Homestay Program ” , Mediterranean Journal of Social Sciences, Vol. 6, No.3, S2, May 2015, Rome-Italy, MCSER Publishing, 539-545.
- APEC Tourism Working Group (2010) Effective Community Based Tourism : A Best Practical Manual, APEC Sustainable Tourism Cooperative Research Centre.
- Bartholo, R. D. G. Sansolo and I. Bursztyn (2009) Turismo de Base Comunitária diversidade de olhares e experiências brasileiras, Rio de Janeiro, Letra e Imagem. http://www.turismo.gov.br/sites/default/turismo/o_ministerio/publicacoes/downloads_publicacoes/TURISMO_DE_BASE_COMUNITARIA.pdf (2019年9月26日閲覧)
- Bôas, C.H.S.V., K. Alves and F.P. S.Silva (2016) “Educação para o Turismo de Base Comunitária no Antigo Quilombo Cabula: introdução à roteirização nas escolas da rede estadual de ensino fundamental”, 68ª Reunião Anual da Sociedade Brasileira para o Progresso da Ciência: SBPC, Porto Seguro, Universidade Federal do Sul da Bahia. http://www.sbpcnet.org.br/livro/68ra/resumos/resumos/4788_1a4dc0f5a068112dcbd64cde4490a7bad.pdf (2019年9月26日閲覧)
- BRASIL. Ministério do Turismo (MTur) (2003) Plano Nacional do Turismo: diretrizes, metas e programas 2003-2007, Brasília, Ministério do Turismo.
- BRASIL. Ministério do Turismo (MTur) (2004) Diretrizes Políticas – Programa de Regionalização do Turismo– Roteiros do Brasil. Brasília, Ministério do Turismo.
- BRASIL. Ministério do Turismo (MTur) (2007) Plano Nacional de Turismo 2007-2010 – uma viagem de inclusão. Brasília, Mi

- nistério do Turismo.
- BRASIL. Ministério do Turismo (MTur) (2008) Edital de Chamada Pública de Projetos MTur Nº 001/2008. Seleção de Propostas de Projetos para Apoio às Iniciativas de Turismo de Base Comunitária, Brasília, Ministério do Turismo.
<https://docplayer.com.br/9268488-Edital-de-chamada-publica-de-projetos-mtur-no-001-2008-selecao-de-propostas-de-projetos-para-apoio-as-iniciativas-de-turismo-de-base-comunitaria.html> (2019年9月26日閲覧)
- BRASIL. Ministério do Turismo (MTur) (2009) Turismo de Base Comunitária diversidade de olhares e experiências brasileiras 2009, Ministério do Turismo.
- BRASIL. Ministério do Turismo (MTur) (2010) Dinâmica e Diversidade do Turismo de Base comunitária Desafio para a formulação de política pública Brasília: Ministério do Turismo.
- Conti, B. R., L. R. V. Gonçalves da Rocha and N.N. Viteze (2018) “As conexões entre a economia solidária e o turismo de base comunitária no estado do Rio de Janeiro”, Observatório de Inovação do Turismo - Revista Acadêmica Vol. XII, No.2,1-21.
<http://publicacoes.unigranrio.edu.br/index.php/raoit/article/view/5049> (2019年12月26日閲覧)
- Dangi, T.B. and T. Jamal (2016) “An Integrated Approach to Sustainable Community-Based Tourism”, Sustainability, 8-475, 1-32.
- Dolezal, C. (2015) “Questioning Empowerment in Community-based Tourism in Rural Bali” , Doctoral Thesis in University of Brighton.
- <https://pdfs.semanticscholar.org/b400/c2f8471adb9aeeff912d4cf0e3a1c7996e75.pdf> (2019年12月26日閲覧)
- Filho, A. V. C., F. P. S. Silva and I. P. Dejardin (2011) “Turismo cultural de base comunitária como possibilidade de política urbana no bairro do Cabula e entorno, em Salvador-Bahia, Brasil”, IX Jornadas de Sociología. Facultad de Ciencias Sociales, Universidad de Buenos Aires, Buenos Aires.
<http://cdsa.academica.org/000-034/484.pdf> (2019年9月26日閲覧)
- Giampiccoli, A, S. Jugmohan and O.Mtapuri (2014) “International Cooperation, Community-Based Tourism and Capacity Building: Results from a Mpondoland Village in South Africa”, Mediterranean Journal of Social Sciences Vol. 5 No. 23, Rome-Italy, MCSER Publishing, 657-667.
https://pdfs.semanticscholar.org/e870/5a718871f22c036308838600ad29616cf0ef.pdf?_ga=2.166931582.1123464538.1575718676-940463902.1575718676 (2019年12月26日閲覧)
- Giampiccoli, A. and M. Saayman (2018) “Community-based tourism development model and community participation” , African Journal of Hospitality, Tourism and Leisure, Volume 7 (4), 1-27.
- Goodwin, H. and R. Santilli (2009) , “Community-Based Tourism : A Success?” ICRT Occasional Paper, 11, 1-37.
- Maldonado, C. (2009) "O turismo rural comunitário na América Latina gênese, características e políticas", In: Bartholo, R, D. G. Sansolo and I. Bursztyn Turismo de Base Comunitária diversidade de olhares e experiências brasileiras, Rio de Janeiro,

- Letra e Imagem, 25-44.
- Martins, L. C. A. and H P. Souza (2013) "História da Localidad do Cabula como Componente Fundamental ao Desenvolvimento do Turismo de Base Comunitária" In: Silva, F. P. S.(eds) Turismo de Base Comunitária e Cooperativismo articulando pesquisa, ensino e extensão no Cabula e entorno, Salvador, EDUNEB, 265-275.
- Martins, L. C. A., F. P. S. Silva and A. E. R. Matta (2017) "Design Cognitivo Aplicado ao Turismo de Base Comunitária : Uma Proposta Socioconstrutivista de Desenvolvimento do Museu Virtual do Quilombo do Cabula" , Gestión Turística. No. 27, 22 - 43. <http://revistas.uach.cl/pdf/gestur/n27/art03.pdf> (2019年12月26日閲覧)
- Mascarenhas, A. N., F. P. S. Silva, J. C. Viana, L. C. A. Martins and R. S. Sena (2019) "Donos de Terras do Cabula: Dos Núcleos Quilombolas ás Roças", IX ETB CES http://www.etbces.net.br/images/etbces/analisis/2019/linha2_artigo_ix_etbces_Luciana_Martins_Donos_de_terras_do_Cabula.pdf (2019年12月26日閲覧)
- Mota, F.O. and B.B.S. Freitas (2014) "Uma Busca pela Identidade Cultural de Origem Quilombola na Região do Cabula em Salvador-Bahia", ANAIS DO VII CBG: VII Congresso Brasileiro de Geógrafos, Associação Geógrafos Brasileiros, Vitória, Espírito Santo. http://www.cbg2014.agb.org.br/resources/analais/1/1404308321_ARQUIVO_ArtigodaCBG.pdf (2019年12月26日閲覧)
- Nascimento A., M.A., F.P.S. Silva and C.C. Santos (2013) "A Dimensão Social de uma Pesquisa Interdisciplinar em Meio Ambiente, Saúde e Criação de Renda, a partir dos Determinantes da Saúde o Social", In: Silva, F. P. S.(eds) Turismo de Base comunitária e Cooperativismo articulando pesquisa, ensino e extensão no Cabula e entorno, Salvador, EDUNEB, 253-264.
- Pereira, S., H and F. P. S. Silva (2016) "As Mulheres e Desenvolment Local: A Experiência do Grupo CULTARTE", I Congresso Internacional de Economia Popular e Solidária e Desenvolvimento Local: diálogo Brasil?, Cuba, Feira de Santana, IEPS-UEFS, 99-110. <https://tbccabula.com.br/quem-somos/nossas-producoes/artigos/7-as-mulheres-e-desenvolvimento-local-a-experiencia-do-grupo-cultarte> (2019年9月26日閲覧)
- Rodrigues P., M. G. (2013) "Processo de Criação da Identidade Visual e do Blog do Projeto TBC Cabula", In: Silva, F. P. S.(eds) Turismo de Base Comunitária e Cooperativismo articulando pesquisa, ensino e extensão no Cabula e entorno, Salvador, EDUNEB, 193-197.
- Silva, F. P. S. (2013a) "Apresentação", In: Silva, F. P. S.(eds) Turismo de Base Comunitária e Cooperativismo articulando pesquisa, ensino e extensão no Cabula e entorno, Salvador, EDUNEB, 13-16.
- Silva, F. P. S. (2013b) "Cultura com Arte, o Lema do Grupo CULTARTE": In Silva, F. de P. S.(eds) Turismo de Base Comunitária e Cooperativismo articulando pesquisa, ensino e extensão no Cabula e entorno, 303-304.

- Silva, F.P.S. and N. S. Coimbra de Sá (eds) (2012) Cartilha (in)formativa sobre Turismo de Base Comunitária "O ABC do TBC", Salvador, DEUNEB.
- Silva, F. P. S., A. E. R. Matta & N. S. Coimbra de Sá (2016) "Turismo de base comunitária no antigo Quilombo Cabula", In : Caderno Virtual de Turismo, vol. 16, no. 2, Rio de Janeiro, CVT, 79-92.
<http://www.ivt.coppe.ufrj.br/caderno/index.php/caderno/article/view/1149> (2019年9月26日閲覧)
- Singer, P. (2002) Introdução à economia solidária. São Paulo, Editora Fundação Perseu Abramo.
<https://bibliotecadigital.fpabramo.org.br/xmlui/bitstream/handle/123456789/22/Introducao-economia-solidaria-WEB-1.pdf?sequence=1> (2019年12月13日閲覧)
- Stone, M.T. (2015) "Community Empowerment Through Community-Based Tourism: The Case of Chobe Enclave Conservation Trust in Botswana", In: R. van der Duim et al. (eds.), Institutional Arrangements for Conservation, Development and Tourism in Eastern and Southern Africa, 81-100.
- Suansri, P. (2003) , Community Based Tourism Handbook: REST Project, Responsible Ecological Social Tour-REST.
<https://www.mekongtourism.org/wp-content/uploads/REST-CBT-Handbook-2003.pdf> (2019年12月19日閲覧)
- Vilas B., C. H. S. and F. P. S. Silva (2012) "Turismo de Base Comunitária na Região do Cabula e Entorno: processo de inventariação da oferta e da demanda turística"
 In: XVI Jornada de Iniciação Científica, 2012, Salvador. Eu, a Ciência e o Mundo. Salvador, Editora de UNEB - Eduneb, vol. 1, 347-347.
<https://tbccabula.com.br/quem-somos/nossa-s-producoes/resumos/9-turismo-de-base-comunitaria-na-regiao-do-cabula-e-entorno-processo-de-inventariacao-da-oferta-e-da-demanda-turistica> (2019年9月26日閲覧)
- Yanes, A., S. Zielinski, M. D.Cano and S. Kim (2019) "Community-Based Tourism in Developing Countries: A Framework for Policy Evaluation", Sustainability, 11, 2506,1-23.
- WWF International (2001) , Guidelines for Community-based Ecotourism Development, WWF. https://wwf.panda.org/wwf_news/?12002/Guidelines-for-Community-based-Ecotourism-Development.%2520Updated%252020.12.2016 (2019年12月19日閲覧)

(2019年9月30日受理/2020年1月16日掲載決定)

University's Role in Sustainable Tourism: A Case Study of Bahia State University, Community Based Tourism Project

Miwako SUZUKI

Osaka City University Urban Research Plaza

[Key words] Sustainable tourism, Community based tourism, Bahia State University,
Multidisciplinary and interdisciplinary approach

In recent years, interest in sustainable tourism has increased. The global development of tourism has produced modern problems such as environmental destruction and the disappearance of traditional culture. There are also expectations for the tourism field to solve social problems and stimulate regional regeneration. In Latin America, sustainable tourism has been developed with the support of NGOs, central governments, and local governments as a means of solving social problems such as poverty, inequality, social exclusion, and environmental destruction. Particularly, in Brazil solidarity economy initiatives promote community based tourism where local residents play a leading role. The Bahia State University's "Community Based Tourism around Cabula and its Surroundings" Project is an example case that promotes community based tourism in 17 neighborhoods around the university.

The focus of this study is on the multidisciplinary and interdisciplinary approach of the project, which supports the entire region. The participating fields in the project include not only tourism and hotel management, but also 11 fields such as communication, education, design and nursing, and graduate programs such as "Education and Contemporaneity" and "Diffusion of Knowledge", and technical incubators. It covers a wide range of activities including research on local culture and history, which is indispensable for promoting tourism, activities in collaboration with primary and secondary education institutions, content creation utilizing digital technology, cultural activities and organizing community encounters.

This case creates a support systems model that is needed to make community based tourism more ideal and viable, and the initiative itself can be said to be local sustainable development. The potential role of universities to enable a multifaceted support through the multidisciplinary and interdisciplinary approach is considered to be significant in sustainable tourism initiatives, which will become increasingly important in the future.